

タイトル	言語学の諸問題に関するイ・ヴェ・スターリンの労作と朝鮮言語学の課業
別言語のタイトル	언어학의 문제들에 관한 이.웨.쓰딸린의 로작과 조선 언어학의 과업
著者	金壽卿 著; 板垣竜太 訳 (Kim, Soo Gyong; Itagaki, Ryuta tr.)
所収シリーズ名	同志社コリア研究ワーキングペーパー
所収号	No. 2
発行者	同志社コリア研究センター (Doshisha Center for Korean Studies)
種別	翻訳
発行日	2021年8月7日

言語学の諸問題に関するイ・ヴェ・スターリンの労作と 朝鮮言語学の課業

金壽卿 著 (板垣竜太 訳)

訳者解題

本稿は、김수경「언어학의 문제들에 관한 이.웨.쓰달린의 로작과 조선 언어학의 과업」『언어학에 관한 이. 웨. 쓰달린의 로작 발표 二주년 기념 문헌집』(조소 출판사, 1952.6.15 発行)の全訳である。著者の金壽卿(1918~2000)は、当時、金日成綜合大学語文学部の副教授であり、北朝鮮の言語学界をリードする気鋭の研究者だった。金壽卿については拙著『北に渡った言語学者』(人文書院、2021年)、特にこの金壽卿の論文については第3章およびIIIを参照いただきたい。

ソ連の最高指導者スターリンが言語学に関する最初の論文を『プラウダ』誌に公表したのが1950年6月のことだった。その直後に勃発した朝鮮戦争により、北朝鮮の学界はこの論文を十分に受け止めきれないでいた。スターリン論文発表の2周年にあたる1952年になって、複数のイベントが開催されるなど、ようやく本格的な受容が進められた。金壽卿が本論文を収録したのは、その一環として朝ソ文化協会が発刊した論文集『言語学に関するイ・ヴェ・スターリンの労作発表2周年記念文献集』である。

また、この文献集の発刊に合わせて、1952年6月20日、朝ソ文化協会中央委員会は学術報告会を開いた。『労働新聞』(1952.6.23)によれば、参加者としては李克魯、韓興洙、金炳濟、李淸源、金孝善、金洸鎮ら、蒼々たる研究者の名前が見える。その冒頭で報告したのが金壽卿であり、その内容はこの論文と同じものだと考えられる。そういう意味で、金壽卿は言語学者の代表、さらには科学者の代表として、スターリン言語学論文を正面から受容するための指針を語る役割を担ったのである。

本論文には章・節の見出しがないが、3つの★印で区切られた7つのパートから成っている。仮にこれを、「はじめに」、第1~5節、「おわりに」から成るものとしておこう。第1節では、1950年の言語学論文以前に、スターリンが書いた言語と民族に関する論文を整理する。短い第2節は、ニコライ・マルとその学派の議論など、スターリンが克服しようとしていた問題について言及する。そのうえで第3節においてスターリン言語学論文の骨子を示す。つづく第4節では、ソ連の言語学や文芸学等の諸分野にスターリン論文が与えた影響を概観する。そして第5節では、スターリン論文を受けた朝鮮語学の課題を提示する。それはその後の朝鮮語研究の大綱となるような内容となっている。朝鮮戦争の真っ最中、まだ金日成綜合大学が順川郡の柏田里に疎開していた時代に、金壽卿はこうした学問的にも政治的にも重要な役割をもった精緻な論文を書き上げたのである。

金壽卿はスターリンのものをはじめとしたソ連の文献をロシア語で読み、朝鮮語に訳している。それを日本語に訳したわけだが、スターリンの著作の引用については、金壽卿の訳語選択を重視する観点から、本文中ではあえて朝鮮語訳から日本語に重訳した。ただし、既存の日本語訳

や原文を適宜対照した。『マルクス主義と言語学の諸問題』の日本語訳については、スターリン全集刊行会訳『スターリン戦後著作集』(大月書店、1954年)を参照し、必要に応じて田中克彦による補訳(『「スターリン言語学」精読』岩波現代文庫、2000年所収)を参照した(前者を「全集訳」、後者を「田中補訳」と略す)。金壽卿の訳語選定が全集訳と有意に異なる場合のみ、参考のために訳注で既存の日本語訳も提示する。戦前のスターリンの著作についても、同様に原則としてスターリン全集刊行会訳『スターリン全集』全13巻(大月書店、1952-53年)を参照する。ロシア語原文も対照する場合は、国立政治文献出版所発行の『マルクス主義と言語学の諸問題』(1953年)およびスターリン全集を参照した。

翻訳公開にあたっては、ご遺族の了承を得た。先に公開した訳稿(『同志社コリア研究ワーキングペーパー』No.1)でも述べたとおり、この日本語訳はもともと精読のために作成したもので、日本語としてはこなれていない部分が多々あるだけでなく、思わぬ勘違いなどもあるかもしれない。コメントなどがあれば、指摘いただけると幸いである(ritagaki@mail.doshisha.ac.jp)。

今から2年前、『プラウダ』紙上において言語学の諸問題に関する科学的討論がおこなわれた。この討論にはイ・ヴェ・スターリン(И.В. Сталин)が参加したのであるが、この事実はただ討論の経過のみならず、言語学の今後の発展を規定するという点において決定的な意義をもつものであった。1950年6月から7月のあいだに発表されたスターリン同志の著述「言語学におけるマルクス主義について」、「言語学のいくつかの問題について」および「同志らに送る回答」は、1冊の完結した科学的労作『マルクス主義と言語学の諸問題』に収録されたのであり、この労作は先進的ソビエト科学における新たな卓越した寄与として、創造的マルクス主義の古典的模範となった。この労作は直接には言語学の諸問題に関係するものだが、同時に社会に関するマルクスレーニン主義的科学的広範な問題を包括しており、これに深奥な理論的解決を与え、哲学、歴史学、政治経済学、文芸学およびその他の科学分野の発展に新たな展望を開くものであった。

イ・ヴェ・スターリンの天才的な労作『マルクス主義と言語学の諸問題』は、独断主義(=教条主義)・読経主義^①との、マルクス主義を卑俗化しようとするあらゆる企てとの、容赦なき闘争の輝かしい模範である。スターリン同志は特異な力によってマルクス主義の創造的性格を明らかにしている。「マルクス主義は自然と社会の発展法則に関する科学であり、被圧迫・被搾取大衆の革命に関する科学であり、あらゆる国々における社会主義の勝利に関する科学であり、共産主義社会の建設に関する科学なのです」——このようにスターリン同志は訓じている(イ・スターリン、マルクス主義と言語学の諸問題、『プラウダ』出版社版、1950年、48頁)。

^① おそらく『マルクス主義と言語学の諸問題』の「同志ア・ホロポフへ」のなかで“начетчики и талмудисты”と表現されている、神学書の乱読者やタルムード訓詁学者のような態度を指すと思われる。全集訳では「聖書学者やユダヤ教宝典学者」、田中補訳では「経文解釈学者諸君」となっている。なお、この部分を、金壽卿は日本語の「ですます調」に相当する文体で訳している。スターリンが同志に宛てた書簡形式の文章であることを受けてのことと思われる。



スターリン同志の天才的労作『マルクス主義と言語学の諸問題』は、言語学の発展における転換点となった。そこでは、社会的現象としての言語の本質と特性に関する全面的な性格規定が与えられており、社会生活において言語のしめる位置と役割、その発達の法則性が解明されている。そうすることによって、マル派^①によって言語学界に醸成された理論的混乱は清算され、言語学の今後の発展のための確固たるマルクス主義的基礎が構築された。

イ・ヴェ・スターリンのこの新たな労作は、これをスターリン同志のそれ以前の天才的諸作品の基礎のうに誕生したものとして考察してこそ、そこで提起され解決された言語学の分野におけるマルクス主義の基本的諸問題のあらゆる深奥性を正当に理解することができる。

イ・ヴェ・スターリンは、その著述『弁証法的唯物論と史的唯物論について』において、マルクス主義の弁証法的方法の、哲学的唯物論の、歴史に対する唯物論的理解の基本的諸問題を叙述しており、マルクスレーニン主義哲学を一層高く新たな段階に打ち立てている。言語に関する、下部構造と上部構造に関する、敵対的階級に分かれていない社会における古い質的狀態から新しい質的狀態への爆発なき移行に関する、創造的マルクス主義に関する、独断主義と読経主義に反対する決定的闘争の必要性に関するスターリン同志の新しい諸命題は、『弁証法的唯物論と史的唯物論について』において叙述された思想のさらなる拡充であり発展である。

言語の問題について、スターリン同志はつねに大きな意義を付与し、嚴重な注意をはらってきた。すでに彼の初期の作品、1904年に執筆した『社会民主党は民族問題をどう理解するか』において、民族問題に関するロシア社会民主労働党の綱領の条目を注釈しながら、スターリン同志は「言語は発展と闘争の道具」^②であり、ロシア・プロレタリアートの利益は各民族のプロレタリアが自己の母国語を使用する頑強な権利を要求すると指摘した(イ・ヴェ・スターリン、全集、第1巻、44頁参照)。

スターリン同志は、その基礎的な労作『マルクス主義と民族問題』(1913年)において、民族問題に関するボルシェビキの理論と綱領を叙述し、ロシア・マルクス主義者の民族理論をオーストリア・マルクス主義者の[オットー・]バウアーと[カール・]レンナーの観念論的・修正主義的民族理論に鋭く対立させた。この労作においては、言語の問題に対してたいへん強い注意が向けられている。

そこでは、民族の必須的標識の一つとしての言語の共通性に関する極めて重要な問題が考察されている。民族の基本的で必須的な四つの標識——言語の共通性、地域の共通性、経済生活の

^① ニコライ・ヤコヴレヴィチ・マル(1864-1934) およびメシチャニーノフを筆頭とするその弟子筋を中心とした学派のことを言う。

^② 「言語は発展と闘争の武器である」(全集訳第1巻、63頁)。スターリンは、ロシアのプロレタリアには「敵といっそうよくたたかうことのできる言語」としての「母語」を使う「完全な権利」が必要だとした(同頁)。原文は“родной язык”で、「母語」とも「母国語」とも訳し得るが、金壽卿はここで「母国語」との訳語を選択している。スターリンの文脈からすれば「母語」の方が適切と思われる(田中克彦『言語の思想』NHKブックス、1975年、100-101頁)。

共通性、民族文化の特徴のなかにあらわれる心的状態の共通性——のなかで、スターリン同志は言語の共通性を最初の座に位置づけた。一つの民族の全体成員に対して共通した言語なくして民族的共通性は存在せず、また存在することもできないと、彼は指摘している。

たとえ国家においては共通語が必須的ではないとしても、それぞれの民族においては共通語が決定的に必須的である。このように、民族を規定する際に最も重要な命題の一つとなるものは、その民族の全体の成員において共通する言語の存在である。この事実一つをとっても、既に40年前に単一の民族語に関する問題にこれほど大きな意義をスターリン同志が付与していたことが分かる。

スターリン同志は、偉大な社会主義10月革命勝利以降の時期、ソビエト多民族国家建設の時期に、言語の問題に対し特別に大きな注意を向けた。

10月革命はソビエト同盟内において民族と民族語の完全な同等性を設定した。ボルシェビキ党により、レーニンとスターリンにより、各民族の広範な人民大衆が使用する母国語は、いつも人民大衆の文化的成長、政治的発展および政治的高揚の強力な武器とみなされた。そのためボルシェビキ党は、自らの実践的活動において全体人民の権利、文化および言語に対する深甚たる尊敬から出発し、かれらの言語の発展のために、かれらの言語による文化の発展のために、かれらの言語自体の豊富化と発展のために、最も有利な諸条件をつくったのである。

スターリン同志の記したところによれば、「数百万の人民大衆は、文化的、政治的および経済的発展の事業においてただ母国語によって、民族語によってのみよい成果をあげることができる」、「党は、わが国の再生された諸民族に対してまっすぐ立ち、自らの民族文化を蘇生させ発展させ、学校、劇場およびその他の文化施設を母国語によって発展させることができるように助けることが必要であるとみなした。」^①(イ・ヴェ・スターリン、全集、第11巻、355・353頁)と言った。

偉大な社会主義10月革命の結果、ソ連におけるレーニン—スターリン的民族政策が実現した結果、早くから圧迫を受けていた諸民族は、極めて短い年月のうちに再び立ち上がり、形式において民族的で内容において社会主義的な自文化を疾風のような速度で発展させた。文字のなかった人民に対する言語建設事業、文字と字母の創造事業が広範に展開されたのであり、標準語制定のための、文法や辞典の編纂のための巨大な諸事業がさまざまな民族において進行されたのである。

^① これは「民族問題とレーニン主義：同志メシコフ、コヴァーリチュクその他への回答」（1929年；全集訳第11巻所収）からの引用である。「それは、幾千万の人民大衆が、文化的、政治的および経済的発展の事業で成功することができるのは、母語、すなわち民族語によるばあいだけだからである」（388頁）。

「党は、わが国の復活した民族がすくくと立ち上がり、その民族文化を活気づかせ、かつ発展させ、母語による学校、劇場その他の文化施設を発達させ、党機関、労働組合機関、協同組合機関、国家機関、経済機関を民族化し、すなわち民族的な構成をもつものにし、その民族の党のカードルとソヴェトのカードルとをそだてあげ、かつ、党のこのような政策をさまたげようとするすべての分子——もっともその数は多くはないが——を抑制するのを援助することが必要であると考えた。」（同386頁）。

スターリン同志は、プロレタリア独裁の時期における諸民族の発展の基本法則は、社会主義的民族へのかれらの革命的改造にあると示している。しかしながらこれは、かれらの言語の革命的改造が必要だということを意味してはいない。逆に、社会主義建設の道に入った各民族の現存する諸民族語を全面的に発展させる、まさにそのような条件の下においてこそ諸民族の社会主義的な改造が可能なのである。

スターリン同志は、常にその労作において、そのなかでも 1929 年に執筆した労作『民族問題とレーニン主義』において、諸民族語がもつ可能性を強調した。スターリン同志の記すところによれば、「[...]諸民族と諸民族語は、同化政策に対する非常な堅忍性と巨大な抵抗性によって特別に区別される。[オスマン・]トルコの同化主義者たちは——あらゆる同化主義者たちのなかで最も残忍な——数百年間、バルカン諸民族を苦しめ、不具者にした。だがかれらは、ただその諸民族を絶滅させることができなかつたばかりか、降伏せざるを得なくなった。残忍性という点においてはトルコの同化主義者たちに負けない帝政ロシアのロシア化主義者たちとドイツプロシアのゲルマン化主義者たちは、百年以上もポーランド民族を分割して苦しめ、これと同じようにペルシャとトルコの同化主義者たちは数百年のあいだアルメニアやグルジア諸民族を分裂させし、苦しめ、打撃を与えたが、かれらはこの諸民族を絶滅させることができなかつたばかりでなく、逆にかれらの方が降伏せざるを得なくなった」^①(イ・ヴェ・スターリン、全集、第 11 巻、347-348 頁)。このようにスターリン同志は支配諸階級の同化政策に対する民族語の非常な堅忍性と巨大な抵抗性を強調している。

スターリン同志は、ソビエト制度のもとでの民族の発達と民族語の発達の性格に関する最も重要な命題を提起し、これを完成させた。「[...]ソ連におけるプロレタリア独裁と社会主義建設の時期は、内容において社会主義的で形式において民族的な民族文化の開花の時期である」とスターリン同志は語っている。民族問題の分野における偏向者たちを批判しながら、スターリン同志は、かれらが「民族文化の発展は、母国語による全般的な初等義務教育の実施運営とあわせて、新しい力によって展開されなければならないということを理解していないこと」が明白であると指摘した^②(イ・ヴ

^① 同じく「民族問題とレーニン主義」からの引用である。「そればかりでなく、周知のように、民族と民族語は、非常な安定性を持ち、同化政策に反抗する巨大な力をもつという点できわだっている。トルコの同化論者たち——すべての同化論者のうちでももっとも残忍な——は、何百年もバルカン諸民族をくるしめ、不具にしてきたが、しかし、これらの民族を絶滅することができなかつたばかりでなく、自らの敗北をみとめざるをえなかつた。残忍な点ではトルコの同化論者たちにけってひけをとらなかつた帝制ロシアのロシア化論者とプロシアのドイツ化論者は、ペルシアやトルコの同化論者たちがアルメニアやグルジアの民族を寸断し、くるしめ、駆逐したように、一〇〇年以上もポーランド民族を寸断し、くるしめてきた。しかし彼らはこれらの民族を絶滅することができなかつたばかりでなく、反対に、これまた、自分の敗北をみとめざるをえなかつた。」(全集訳第 11 巻、380-381 頁)。ここでスターリンは言語が“устойчивость”と“сила”をもつと言っているが、全集訳では「安定性」「力」と訳しているところ、金壽卿は「堅忍性」「抵抗性」と、より頑強に耐え抜くような訳語を選定している。

^② 「ソ同盟共産党(ボ)第 16 回大会にたいする中央委員会の政治報告」(1930 年;全集訳 12 巻所収)のくだりである。「実際は、ソ同盟におけるプロレタリアートの独裁と社会主義建設の時期は、内容においては社会主義的、形式においては民族的な民族文化繁栄の時期である。[...] 彼ら [=党内の「大ロシア

エ・スターリン、全集、第12巻、368頁)。

スターリン同志は、かつて1925年の東方勤労者共産主義大学の学生集会における演説『東方人民大学の政治的任務について』において、また『民族問題とレーニン主義』や全同盟共産党(ボルシェビキ)第16回大会報告等において、一つの国で社会主義が勝利した時期と、全世界で社会主義が勝利した時期における、言語発達の弁証法を解明した。そこでスターリン同志が指摘したことによれば、一つの国での社会主義の勝利の時期は民族語の発達と開花の時期であり、全世界におけるプロレタリア独裁の最初の段階もまた民族語の成長と開花の時期である。全世界におけるプロレタリア独裁という第二の段階になって、そして世界資本主義経済の代わりに単一の世界社会主義経済が造成されたそのときになってはじめて、民族語と並行して一種の共通語のようなものが創造されるとスターリン同志は語る。この段階においては、民族語と共通の国際語は並行的に存在するであろう。このとき、最初は地帯的な諸言語が現れ、その次に地帯的な諸言語が共通の国際語へと合流するであろう。この共通の国際語は、ドイツ語でもロシア語でも英語でもなく、諸民族語と地帯的諸言語の優れた諸要素をそのなかに取り込んだ、新しい言語となるであろう。共通の世界語への移行および民族語の凋落は、世界社会主義経済の体系が堅固なものとなり、それが人民らの生活のなかに入っていく、その時はじめてなされ得るものである。

以上から、スターリン同志がその複数の労作において言語の問題について大きな関心を傾けてきたことは明白である。言語学におけるマルクス主義の諸問題に関するスターリン同志の新たな労作は、何か孤立した特異な現象ではなく、これに先行する時期に彼が研究する理論的基礎のうえに創造されたものである。この労作は、同時に言語科学発展における、マルクスレーニン主義理論の全般的発展における、弁証法的小および歴史的唯物論の今後の発展における、新たな天才的前進となる。



〔次に、〕言語学におけるマルクス主義の諸問題に関するイ・ヴェ・スターリンのこの新たな労作が登場した条件と諸事情について考察する必要がある。それは…

第一に、共産主義建設の時期における言語学が社会主義的発展の要求よりも、この科学の前にある課業よりも、明らかに立ち後れていた状況と、停滞した状態を示していたという事実。まさにソ連で共産主義建設が進行している時期、全体民族の創造的力が開花している時期、形式において民族的で内容において社会主義的な文化の飛躍的な開花が進展している時期である今日における科学としての言語学の立ち後れた状況は、今後の前進を抑制し、ソ連における言語建設の巨大な経験を正しく一般化する可能性を与えない障害物となった。

人的排外主義者〕は明らかに、民族文化の発展が、母語による一般義務初等教育の実施および促進とともに、新しい力で進展するということを理解していない。」(390頁)。

第二に、ソビエト言語学界にマルクス主義を卑俗的に歪曲したエン・ヤ・マル(Н. Я. Марр)の誤った理論が支配している事実。この理論は、諸言語の民族的自主性、民族的性格の特殊性の研究の必要性を事実上否認する方へと導いたのであり、言語における文法の役割を評価しないことによって、各級学校における正常的な言語研究組織を妨害するものであった。

第三に、言語学の諸機関のなかに耐えがたい体制が作りだされたという事実。この体制は、若い科学的力量を発現させるための正常な条件を保障しておらず、粗野な官僚主義が横行して批判と自己批判が忘却された体制、マルとその弟子たちの「新言語理論」を少しでも批判しようという人に対してあらゆる組織的対策をとる、スターリン同志が命名したところによれば、アラクチェフ式体制であった。

言語学界に醸成されたかかる状況は、慎重な干渉を必要とすることになった。全同盟共産党(ボルシェビキ)中央委員会とスターリン同志自らの発起により、『プラウダ』紙上で、言語学の諸問題に関する自由討論が進行されると宣布された。討論において、言語学の分野で事業をおこなう全ての科学従事者^{イルクン}は自由に自らの意見を陳述し、自らの関心をひくあらゆる問題を提起し、言語学会の状況を評価し、この科学が置かれている停滞状態から抜け出す道を指摘するあらゆる可能性を得ることになった。討論の過程では、スターリン同志も参加したのであるが、言語学の諸問題に関する彼の天才的な労作は、この科学の分野において新たな時期を開く画期的な作品であった。



スターリン同志は、言語は社会が存在する全時期を通じて作用する社会的現象のうちの一つであると論じている。言語は、社会の誕生および発展とともに誕生し発達する。社会の外に言語は無い。したがって言語とその発達^{イリクン}の法則は、それが社会の歴史と、それにくわえてこの言語の創造者であり保有者である人民の歴史と、切っても切れない連携のなかで研究されてはじめて理解することができる。

言語に関するマルクスレーニン主義的理論を発展させながら、スターリン同志は言語についての古典的な定義をおこなっている。「言語は、その助けを得て人々が互いに交際し、思想を交換し、相互の理解を達成する手段であり道具である。言語は、思惟と直接的に連結し、諸単語と文章における諸単語の結合のなかでの思惟の活動の結果、人間の認識活動の成果を記録して確固たるものとし、そうすることで人間社会における思想の交換を可能にする」^①(イ・スターリン、マルクス主義と

^① 「言語は手段であり用具であって、人々はこれによって、たがいに交通し、思想を交換し、相互の理解にたつのである。言語は思惟と直接にむすびつき、人間の思惟活動の結果や認識活動の成果を単語や文中の単語の組合せのうちに記録し定着させ、このようにして、人間社会における思想の交換を可能にする。」(全集訳 150 頁)。当時のロシア語文法の統辞論においては単語結合論が中心的な役割を占めていたが、日本語訳がそのことをあまり意識していないのに比べ、金壽卿訳は、そこはもちろんしっかり訳出されている。

言語学の諸問題、18・19頁)。思想の交換は、恒久的で切実に必要なものである。それなしには、自然の力との闘争において、必要な物質的な財物の生産の闘争において、人々の協同的な行動を調節することはできないのであり、社会的生産の存在自体も不可能になる。

言語を上部構造とみるマル派の非マルクス主義的な見解を暴露したのち、スターリン同志は言語の独特な特性について、余すところなく性格規定を与えている。もし下部構造が経済的に社会にサービスし、上部構造が政治的、法律的、美学的およびその他の思想によって社会にサービスし、社会のために相応の政治的、法律的およびその他の諸機関を創建するのならば、言語の独特の特性は、それが人々の交際手段として、社会における思想交換の手段として、生産から下部構造にいたるまで、下部構造から上部構造にいたるまで、人間活動のあらゆる面において人々に相互理解し共同的な事業を調節し得る可能性を与える手段として、社会にサービスする点にある。したがって言語の行動範囲は、上部構造の行動範囲よりもずっと広くて多面的である。のみならず、その範囲はほぼ無制限である。

言語科学の発展において極めて重要な意義を有するのは、言語の構造、その構成要素に関するスターリン同志の命題である。言語において主たるものは、その文法構造と基本語彙であり、言語の文法構造と基本語彙は言語の基礎、その特性の本質を構成する。数世紀に渡って創造され、言語の基礎を成す文法構造と基本語彙は、強制的同化に対する巨大な堅忍性と非常な抵抗性を言語に付与する。

社会における人々の交際手段としての言語を考察しながら、スターリン同志は、言語の「階級性」に関するマルの誤った、非マルクス主義的な理論を排撃している。民族的言語から種族的言語への、種族的言語から準民族の言語への、準民族の言語から民族的言語への発達のあらゆる段階において^①、言語はつねに社会に対して共通で単一的であり、社会的地位には関係なく社会の成員に平等にサービスする。言語の共通性は、民族の最も重要な標識のうちの一つであるとマルクス主義は示している。「民族語は民族の成員に対して共通のものであり、民族に対して単一的、非階級的、全人民的な言語であると歴史は語っている。」^②——このようにスターリン同志は書いている。

スターリン同志は、言語の交配を、数年間でその結果があらわれるような決定的な打撃となる唯一の行為のようにみるマル派の反科学的な理論に、殲滅的な批判を加えた。民族問題に関するマルクスレーニン主義理論を一層発展させながら、スターリン同志は、世界的な規模における社会主義の勝利以前の時期における言語の交配と、全世界的な規模における社会主義の勝利以後の

^① 「プレミヤ (племя)」に「種族」、「ナロードノスチ (народность)」に「準民族」(日本語訳では「民族体」)、「ナーツィヤ (нация)」に「民族」の訳語が当てられている。

^② 「歴史は、これらの種族や民族体の言語が、階級的なものではなく、全人民的なものであり、種族や民族体にとって共通な、彼らに理解されるものであったことを、かたっている。」(全集訳 140 頁)。ここで金壽卿は、種族・準民族の言語の話なのに、なぜか民族の言語の話に置き換えて訳している。

時期における言語の合流の過程について、深奥な科学的分析を加えた。搾取諸階級が世界で支配的力量をもっており、民族のおよび植民地的な圧迫がいまだに継続しており、民族的な孤立性と諸民族の相互不信が国家的差異によって強化されており、民族的平等、民族と諸言語の平和的で友誼的な協力がいまだにない——そのような条件のもとでは、言語の交配は諸言語の協力と相互的な豊富化のプロセスとして進むのではなく、そのなかの一つの言語の支配のための闘争のプロセスとして、一つの言語の同化と他の言語の勝利のプロセスとして進行することになる。

世界帝国主義が存在しなくなり、搾取諸階級が転覆され、民族のおよび植民地的圧迫が清算され、民族的孤立性と諸民族の相互不信が諸民族の相互信頼と接近へと取って代わり、民族的平等が現実化し、諸言語の抑圧及び同化政策が清算され、諸民族の協力が円滑に進行し、諸民族が協力のプロセスにおいて自由に共に豊かになるような、全世界的な規模における社会主義の勝利以降の時期においては、言語の交配の過程がまったく異なって現れる。「このような条件のもとでは、特定の諸言語の抑圧および敗北や他の諸言語の勝利について言うこともできなくなるのは明白です。ここでわれわれは、一方が敗北し他方が闘争において勝利者として現れるような、そのような二つの言語を問題とするのではなく、数百の民族語を問題にすることになるのであり、諸民族の長久な経済的、政治的および文化的な協力の結果、この数百の諸民族語のなかから、はじめは最も豊富になった単一の地帯的諸言語が現れ、その次に地帯的諸言語が一つの共通の国際語へと合流するのであり、この国際語は、もちろん、ドイツ語でもロシア語でも英語でもなく、民族語および地帯的諸言語の優れた諸要素をそのなかに取り込んだ新しい言語であるでしょう」^①と、スターリン同志は示している(イ・スターリン、マルクス主義と言語学の諸問題、47頁)。

著作『マルクス主義と言語学の諸問題』において、スターリン同志は、唯物論的言語理論を全面的に作成し、言語発達の客観的法則性を解明しながら、言語学における観念論と形而上学を徹底して暴露した。マル派は意味論を濫用し、思惟をその物質的、言語的基礎から遊離させることによって観念論に陥ってしまった。マルは、人々の交際が言語なしに、言語の「自然的物質」から解放された思惟のみの力によっても実現することができると論証した。この誤った命題は、現代ブルジョワ哲学者の反動的、観念論的理論と野合しているのである。

観念論者たちとマルクス主義を卑俗化する者たちを暴露した後、スターリン同志は思惟と言語との相互関係に関するマルクス主義の最も重要な命題の一つを唯物論的に解明した。言語は思想

^① 「このような条件のもとでは、一方の言語が圧迫され敗北し、他方の言語が勝利することが問題になりえないのは、明らかである。ここでわれわれが当面するのは、闘争の結果一方が敗北をこうむり他方が勝ちのこるような二つの言語ではなく、何百という民族語のことであって、それらの民族語のなかから、永続的な諸民族の経済的・政治的・文化的協力の結果として、まずもっとも豊富になった単一の地帯的言語がいくつかできて、つぎにそれらの地帯的言語が一つの共通の国際語へと融合するであろう。もちろん、この言語はドイツ語でもロシア語でも英語でもなく、民族語と地帯的言語のうちの最良の要素をとり入れた新しい言語であるだろう。」(全集訳 182頁)。

の直接的な実在であり、言語なくして思想は存在もせず、存在することもできないのであり、言語のうえでの思惟の働きの結果、人間の認識活動の成果が固着される。言語的物質から解放された、言語の「自然的物質」から解放された、むきだしの思想などというものは存在しない。音声言語あるいは単語の言語^①は、つねに人々の交際の完全な手段となり得る、人間社会の唯一の言語であり、それは身ぶりの言語(「手」の言語)あるいは他のいかなる符合によっても取って代わることができない。

このように、言語学における観念論と形而上学を粉碎し、言語に関する完璧な唯物論的理論を創造したことで、スターリン同志は歴史的唯物論に存在していた一部の空白を補充し、社会に関するマルクスレーニン主義科学を新たな天才的な諸発見によって豊富なものにしたのである。



マルクス主義言語学の確固不動の基礎は、スターリン同志によって築かれることになった。スターリン的理論によって武装されたソビエト言語学者たちは、言語学のあらゆる問題の研究に勇敢に、自信をもって着手する完全な可能性を得たのであり、これにより広範な組織的、創造的事業が活発に進行することになった。

ソ連科学アカデミー常任委員会の決定により、1950年7月に組織された言語学研究所は、所長でアカデミー会員ヴェ・ヴェ・ヴィノグラードフ(В. В. Виноградов)の指導のもとで、ソビエト連盟内の全体の言語研究事業の組織的な中心となった。

ソビエト言語学の前に提起された最初の課業は、エン・ヤ・マルと彼に近い戦友たちが言語学に導入した理論的混乱を完全に暴露する事業であった。エン・ヤ・マルとその後継者たちの誤った、反マルクス主義的な諸命題の体系的で科学的な批判は、言語学内部にマルクス主義をしっかりと樹立するための必須の前提の一つとなったのである。この方向で、ソビエト連盟内の中央と地方において巨大な事業が進められており、ヴェ・ヴェ・ヴィノグラードフ、アー・エス・チコバワ(А. С. Чикобава)、エル・アー・ブラホフスキー(Р. А. Броховский)をはじめとする多くの言語学者の労力により講義や報告が進められており、論文や冊子が執筆された。

エン・ヤ・マル、イ・イ・メシチャニーノフ(И. И. Мещанинов)およびかれらの後継者らの方法論的諸命題を科学的に批判する事業のなかで特別な意義を有するものは、ソ連科学アカデミー言語学研究所編集による論文集『言語学におけるマルクス主義の卑俗化と歪曲に反対して』であり、そこではいわゆる「新言語理論」の基本的言語学思想がスターリン的言語理論の立場から全面的に批判されている。

また重要な課業は、言語学科目の教授事業に植え付けられたエン・ヤ・マルの「成果」を払拭するための闘争であった。このため、1950年8月にソ連高等教育省の主催により、モスクワにおいて

^① この辺りは「同志デ・ベルキンと同志エス・フーレルへ」より。この表現の原文は“язык слов”で、全集訳では「ことばの言語」、田中補訳では「舌ことば」と訳されている。

全連盟言語学関係教育者協議会が招集され、この会議で多くの言語学関係の教授要綱が基本的に検討され、新たな要綱が作成され、この要綱に依拠して新たに大学用教科書教材が編纂されることになった。

スターリン的言語理論を宣伝、解説および具体化する際に、大きな役割を果たしたのはヴェ・ヴェ・ヴィノグラードフの編集により刊行された論文集『イ・ヴェ・スターリンの労作に照らしてみた言語学の諸問題』であり、これに続いて刊行された論文集『現代ロシア語の文章論〔=統辞論〕の諸問題』は言語の文章論的体系の複雑で困難な諸問題の解決を試みた点において、肯定的役割を果たした。

ソビエト言語学者の前に提起された重要で実践的な課業の一つは、中学校における言語教育に対する支援事業であった。このため 1950 年 11 月に「言語学に関するイ・ヴェ・スターリンの労作とソビエト学校における言語教育の問題を討議するソ連科学アカデミア文学言語学分科とロ連教育科学アカデミア合同会議」が招集された。

中学校において急いで解決を要求している第一次的な理論的諸問題としては、言語体系における語彙論と文法論との相互関係、形態論と文章論との相互関係、ロシア語の語辞造成論と文法と語彙論に対するその関係、文体論と文法、文の副成分に関する理論、部門の類型に関する理論などをあげることができる。

比較・歴史的方法に反対するエン・ヤ・マルとその弟子たちの継続的闘争は、ソビエト言語科学に大きな害毒を及ぼした。エン・ヤ・マルとその後継者たちは、比較・歴史的语言学により設定されたあらゆる言語学的諸概念——語族、親族性、方言、小方言——を全て拒否するにいたった。

スラブ諸言語の比較・歴史的研究の発祥地であり、この分野においてエフ・エフ・フォルトゥナートフ(Ф. Ф. Фортунагов)、アー・アー・シャフマトフ(А. А. Шахматов)、イー・アー・ボードゥアン・ド・クルトネ(И. А. Бодуэн де Куртене)のような世界的な学者を生んだソビエト連盟内において、最近 25 年間、親族的諸言語の研究はほぼ中断した状態にあった。だがこうした非正常的な状態は終末を告げた。比較・歴史的方法が、その欠陥にもかかわらず有している貴重さについて、言語発達の法則を探求する事業における親族的人民の諸言語の比較研究がもつ有用性について、イ・ヴェ・スターリンの教示に鼓舞されながら、ソビエト言語学者はこれに関係する各種理論的な諸問題を提起し、研究した。しかしこの分野において達成された成果はまだ少ない。比較・歴史的方法を一層完成させ、これをもって言語の発達法則を認識する真の道具たらしめるための課業が、ソビエト言語学者の前に提起された。

最近 20～25 年間にソビエト連盟内の民族共和国諸国や諸州では、実践的言語建設の分野において、数多くの貴重で肯定的な事業が進められた。しかし、地方においては「新言語理論」の破滅的影響をこうむり、理論言語学をほとんど発展できずにいた。民族語を研究するソビエト言語学者

らの前にはイ・ヴェ・スターリンの労作に立脚し、理論的および実践的性格を帯びた複雑で多様な諸問題を解決する課業が立ちはだかつており、そのなかでも文語の文法的、語彙論的および成句論的な体系の研究、民族語発達史の研究、教科書と辞典の編纂、綴字法の規範制定などが重要な問題として提起された。

イ・ヴェ・スターリンは、科学において初めて語彙構成に関する深奥で整然とした理論を創造した。ソビエト科学はマルクス主義語彙論の一般理論を得ることになったのであり、これに基づいて言語の語彙体系とその歴史研究上の困難な諸問題および辞典編纂の理論と実践の諸問題の研究に着手することができるようになった。

ロシアの辞典編纂事業は、輝かしい長久の伝統と大きな経験を有しているのに、この豊富な実践的経験は、いまだ整理できずにおり、理論的に一般化され得ずにいる。この分野の当面の課業としてマルクス主義的辞典編纂の理論の創造が提起されており、ソ連科学アカデミア言語学研究所において準備している語彙論と辞典編纂の諸問題に関する理論的論文集は、この方向での最初の一步となるであろう。

ソビエト言語学発展において特に重要な意義をもつのは、基本語彙とともに、言語の基礎、その特性の本質をなす言語の文法構造に関するスターリン同志の卓越した理論である。文法構造に関するスターリン同志の理論を討議し具体化する過程において、一連の極めて重要な諸問題が提起され、文法と語彙論との相互関係、文法的範疇と論理的範疇の関係、言語の文法構造発達の法則性、文法的抽象の性格と類型の諸問題が議論されることになった。

スターリン同志が提起した一般言語学の基本テーマの一つである言語と思惟との関係の問題は、いまだ言語学者と哲学者のあいだに広範で深奥な討議の対象となり得ていない。しかし、まさにこの問題の研究にエン・ヤ・マルとその弟子たちはあまたの混乱をもたらしたのである。現代ブルジョワ言語学の観念論的潮流との闘争の成果は、この問題の科学的解決のいかに大きくかかっていると言うことができる。

スターリン同志の労作に照らして、ソビエト芸術・文学の言語に関する問題が極めて先鋭的に提起された。この問題に関する『文学新聞』紙上の自由討論は、作家、評論家、広範なソビエト・インテリ層に巨大な反響を引きおこした。芸術・文学の言語に関する問題は、文芸学の諸問題を討議する科学会議における中心的な問題のうちの一つとなった。

スターリン同志の労作は言語学者たちに芸術・文学の、なかでもソビエト芸術・文学の、言語と文体の研究に特別な注意を向けるよう要求している。科学アカデミア言語学研究所の科学研究事業計画のなかで、極めて責任があり、また榮譽のある問題——社会主義的民族の言語発達の法則性研究の問題が初めて登録されることになった。

ソビエト科学発展において、スターリンの歴史的功績の一つは、科学的遺産に対する虚無主義

的な態度を、彼が峻烈に非難したという事実である。英明なスターリン的言語理論によって武装された今日の言語学者の任務は、過去の遺産のなかから真の言語科学の建設に必要な貴重なものを選び出し、客観的に正当な正しい歴史を叙述する事業である。

マル主義の支配にともなう破滅的な帰結の一つは、国内言語学幹部の力量の分散であった。今日、全てのソビエト言語学者は、かれらの地位・年齢にかかわらず、言語に関するスターリン同志の天才的理論の周囲にかたく一つに集まり、仲睦まじい科学従事者の家族を成している。言語学の力量のこうした集結を促進する際に、『ソ連科学アカデミア文学言語学分科通報』と、1952年から新たに刊行されることになった言語学研究所編集『言語学の諸問題』が、必ずや大きな力になるであることは再言を要しない

以上、イ・ヴェ・スターリンの天才的な労作『マルクス主義と言語学の諸問題』の出現以降、ソビエト言語学がその事業を改編する途上で提起された基本的諸問題の総括と展望を、極めて簡単ながら概観してきた。このような概観によっても、新たな道へと鼓舞され、駆り立てられたソビエト言語学が、最近どれほど大きな創造的事业を展開しているかを理解するのは困難ではない。スターリン的科学的科学は強力で万能であるだけに、ソビエト言語学が近い将来、世界言語学において最も輝かしい第一の地位を占めるであろうことは疑う余地がない。

ここに必ず付け加えておかなければならないことは、これらあらゆる広範な研究事業に赤い糸のように貫かれている基本的な契機として、言語科学における歴史主義に対する科学的な、マルクス主義的な理解が確立されているという事実である。「もし言語学の重要な課業が言語発達の内的法則の研究であるということが正しいとするならば」という文章に現れているような、言語学の主要課業に関するスターリンの規定は、その本質において歴史的側面における規定なのであり、言語科学は、他の社会科学と同様に、究極的にはただ歴史的科学的、歴史的言語学としてのみ理解し得るということを明確に教えてくれている。

したがってスターリンの指示に依拠した言語学の再編が、何よりもまず言語学のなかでも歴史的分科に適用されるのは当然のことである。すなわち、親族的諸言語の比較・歴史的研究、個別的諸言語の歴史的諸考察が、真の歴史主義の原則によって貫徹されなければならないことは再言を要しないし、この全ての事実はわれわれに実に大きな示唆を与えてくれる。



マルクス主義的言語学の発展の天才的な綱領が叙述されている、言語学の諸問題に関するスターリン同志の労作は、言語学の歴史においてまさにスターリン的段階と呼ばれるべき、そして言語学の諸分科の開花の時期となるべき、そうした新たな時期の発端となる。

スターリン的段階に入ったソビエト言語学の現状に照らし、朝鮮言語学の前に提起された課業は実に巨大である。スターリンの天才的労作によって、原則的諸問題に関しては既に基本的な解決

が達成されている。それゆえ、われわれには朝鮮語のさまざまな具体的諸問題をスターリンの指示によって創造的に探求し、解決する課業が待ち構えている。

まず何よりも、言語学の主要課業に対するスターリン的規定に照らして、朝鮮語の歴史的発達の法則性を探究する問題が提起されており、そのために言語史建設の新たな諸原則が適用されなければならない。

それは、第一に、言語の歴史と社会の歴史および人民の歴史との不可分的な連携の原則である。「言語とその発達の法則は、それが社会の歴史と、そして研究される言語が所属しこの言語の創造者であり保有者である人民の歴史と、切っても切れない連携のなかで研究する、まさにそのような場合にのみ理解することができる。」^①——このようにスターリン同志は示している(イ・スターリン、マルクス主義と言語学の諸問題、18頁)。したがって、真に言語の発達法則を研究するためには、ブルジョワ言語学のように、社会の歴史、人民の歴史から離れ、単純な語音の変化や文法形態の経験的記述で満足することはできない。特に朝鮮語の起源、系統、近隣諸人民との言語的親族性の有無を決定するために、比較・歴史的方法の精密化とともに、言語学者と歴史学者、人類学者、考古学者、民俗学者らとの緊密な科学的接触の設定が要求されることは、再言を要しない。加えて、朝鮮語史のこの分野における過去の日帝植民地政策に服務した御用学者らの歪曲から、朝鮮語発達の真の姿を救出するためには、マルクスレーニン主義の科学的方法論に立脚した科学徒たちの特別な努力が要求されるということを強調しないわけにはいかない。

また、ほぼ不断の変化の状態にある言語の語彙構成の歴史を探究するためには、「言語の語彙構成は[...]社会制度の変化、生産の発展、文化や科学などの発展に関連して発生した新たな諸単語によって、現存する語彙を補充する方法によって変化」するだけに^②(イ・スターリン、マルクス主義と言語学の諸問題、21頁)、生産の歴史、社会生活の歴史、思想史、科学技術文化の発展との緊密な連携のもとに考察されなければならない。偉大なソビエト軍隊による 8.15 解放、米・英帝国主義侵略者に反対する祖国解放戦争のような朝鮮人民と朝鮮社会の発展における巨大な諸事変、異民族との交渉、文物の交流等は、特に歴史的語彙論の分野で大きな考慮が集中的になされる契機となる。

第二に、言語発達の内的法則の探求という問題である。言語発達の法則は、下部構造、上部構造の発達および交替の法則とは一致しない。言語発達の内的法則はまず、言語の本質から帰結

^① 「言語とその発展法則が理解されるのは、言語が社会史や人民の歴史と緊密にむすびつけて研究されるばあいだけである。というのは、いま研究しようという言語はこの人民のものであり、人民が言語の創造者で、保持者であるからである。」(全集訳 150 頁)。

^② 「しかしながら、言語の語彙は、上部構造のように古いものを絶滅して新しいものを建設することによって変化するのではなく、社会制度の変化、生産の発展、文化や科学などの発展につれてうまれた新しい単語を現行の語彙に補充することによって変化する。」(全集訳 152 頁)

する言語発達の一般的法則と区別されなければならない。言語発達の一般的法則としては、言語の各種構成要素の不均衡的な発達の法則(言語の語彙構成は不断に変化し、基本語彙はたいへんゆっくり変化し、文法構造はこれよりも一層ゆっくりと変化する)、言語の個別的構成要素の相互浸透可能性の法則(言語交配の場合、語彙構成は言語の相互間に互いに浸透し得るが、文法構造と基本語彙は交配の過程に巻き込まれることなく、そのまま保存される)、言語の漸次的変化の法則(言語の発達は新たな質、言語の新たな構造の要素の漸次的で長久な蓄積の方法によって、古い質の要素の漸次的死滅の方法によって進行する)など、全ての言語に普遍的に適用される諸法則をあげることができる。これとは異なり、言語発達の内的法則は、具体的な言語構造の独特な特性に規定され、この特性は個別的な言語の文法構造とその基本語彙に集約的に現れる。すなわち、この法則はそれぞれの言語において、その文法構造、その基本語彙の保存と発達のうえに反映される。スターリン同志が強調しているように、「言語の発達は[...]既存言語の基本諸要素を発現させ完成させる方法によって進行」するだけに^①(イ・スターリン、マルクス主義と言語学の諸問題、23頁)、言語発達の内的法則は何よりも具体的言語の文法構造と基本語彙の発現と完成の法則であり、まさにここに言語の堅忍性、言語の民族的自主性が特に明確に現れる。したがって言語発達の内的法則を研究するということは、言語に既存する質の発露としての、言語の民族的独自性の表現としての言語の構造を、そしてそこに作用する法則的規範の体系を、研究することを意味する。言語の文法構造とその基本語彙が、堅忍性の面において特に大きいものであり、強制的同化に対する言語の非常な抵抗性の土台となるとともに、交配したときに勝利した言語がたいへいその特性を保存するということを考慮に入れた場合、歴史的発達から見た言語の民族的自主性に関する問題は、それぞれの言語史構築において極めて重要な意義を有する。イ・ヴェ・スターリンは、ロシア語が、その歴史的発達の過程において他の諸人民の言語と交配した事実と言及しながら、ロシア語はこうした場合、いつも勝利者となって現れたと語っている。

「もちろん、ロシア語の語彙構成は、このとき他の諸言語の語彙構成によって補充された。しかしこれはロシア語を弱体化させなかったばかりか、反対にロシア語を豊富なものにし、これを強化した。

ロシア語の民族的自主性に関して言うならば、それは少しも損失を受けなかった。なぜならば、ロシア語はその文法構造と基本語彙を保存しながら、自らの発達の内的法則によって前進しつづけ、完成していったからである。」^②(イ・スターリン、マルクス主義と言語学の諸問題、25頁)

このように、言語発達の内的法則は、言語の民族的自主性の土台であり、朝鮮語の場合、朝鮮

^① 「実際には、言語は、現存の言語を破壊し、新しい言語をつくることによって発達したのではなく、現存の言語の基本的要素を発展させ完成することによって発達したのである。」(全集訳 154頁)

^② 「もちろん、このばあいロシア語の語彙は他の語彙を犠牲として補充されたが、このことは、ロシア語をよわめなかったどころか、かえって、豊富にし、つよめた。ロシア語の民族的独自性についていえば、それはすこしも損傷をうけなかった。なぜなら、ロシア語はその文法構造と基本的な単語のたくわえを保持して、自己の内的な発展法則にしたがって前進し完成をつづけたからである。」(全集訳 157頁)

語の内的発達の法則を探求する途上において、朝鮮語の民族的自主性を明らかにする問題が極めて重要なものとして現れる。

朝鮮語は、漢文化の影響を莫大にこうむり、語彙の大部分が漢字語となっており、したがって朝鮮語の民族的自主性は疑いの余地があるという人々がいる。しかし、こうした発現が何の根拠もないことを証明するのは、難しいことではない。もちろん漢文化が朝鮮に広範に輸入され、朝鮮語の発達に漢文の影響が少なくなかったことは事実である。しかし、その結果、朝鮮語が漢文の文章論に依拠して組織されたのではなく、反対に漢字語彙が朝鮮語の文章論に依拠して文章のうえに結合されたのであり、漢文それ自体のなかにも朝鮮語文章論に依拠した朝鮮式漢文調が発生したのである。朝鮮語に漢字語彙が多いのは事実だが、これは大部分が浸透性の最も多い言語の語彙構成に属するのであって、言語の基礎となる基本語彙のなかで最も堅忍性のある部分はほぼ全てが固有朝鮮語なのである。個別的な漢字語彙も、それが朝鮮語において使用されるとき、漢文文法の規則に依拠するのではなく、朝鮮語の単語の変化の規則、朝鮮語の単語の結合の規則に依拠して使用される。たとえば「研究」という単語は、それ自体だけをみれば漢文においては品詞の所属が未分化の状態にあるが、朝鮮語に入ってくれば、名詞(「研究[연구]」)と動詞(「研究する[연구하다]」)に、朝鮮語の単語の変化の規則と語辞造成の範型によって分化している。「…的」という表現は、漢文では形容詞として扱われるものであるが、朝鮮語の形態論では「英雄的だ[영웅적이다]」、「英雄的に[영웅적으로]」などのように、文章において述語あるいは補語として用いられるとき、「…だ[이다]」、「…に[으로]」など、名詞と同様の結合母音あるいは格吐を要求する点などにおいて^①、それが名詞であることが明らかである。

また、漢字語彙として構成された語辞結合も、それが朝鮮語に入ってくると、朝鮮語の単語の結合の規則に依拠し、あるいは語幹どうしの直接(例:歴史諸問題、歴史的諸問題)、あるいは属格の吐「…の[의]」を仲介とし(例:歴史の諸問題)、あるいは現在時制の吐「…な[인]」の助けをかりて(例:歴史的な諸問題)、結合されるのである。

このように朝鮮語の文法構造と基本語彙は、漢文の影響にもかかわらず、本質的に変化なく保存されたのであり、むしろ朝鮮語の語彙構成を豊富にしながら、自らの発達の内的法則にしたがって前進しつづけて完成したために、朝鮮語の民族的自主性は少しも損失を被らなかったのである。

また、数十年間、日本帝国主義者たちは朝鮮人民の言語を「破壊し破滅させ掃討しようと努力した。」この時期に朝鮮語の語彙構成には日本語の単語や諸表現が入ってきたが、朝鮮語は「耐え抜き、生き延びた。」なぜか。なぜならば、朝鮮語の「文法構造と基本語彙が基本的に保存された

^① 「名詞と同様の結合母音」とは、それぞれ ‘이다’の ‘이’、‘으로’の ‘오’のように、子音で終わる名詞を結合するために挿入される母音のことを指す。また「格吐」とは、格を示す助詞のことである。吐(토)は、体言の助詞や用言の語尾など、文法範疇を示す朝鮮語の文法要素を示す用語である。

からだ。」このように朝鮮語は日本帝国主義者たちの「強制的同化に対する巨大な堅忍性と非常な抵抗性を示している。」^①(イ・スターリン、マルクス主義と言語学の諸問題、21・22頁)

歴史は、朝鮮人民がいつも自らの言語の民族的自主性を固守してきたことを示しており、言語の堅忍性を証明するこうした歴史的事実は、今日の同化主義者、植民地主義者であり新たな戦争の放火者である米・英帝国主義者たちの、他の人民の自由を剥奪しかれらの文化、かれらの言語を破壊、破滅、掃討しようと努力する計画が、どれほど冒険的で無根拠であるかを重視しても余りある。言語の堅忍性に関するスターリン同志の命題は、帝国主義侵略者たちのイデオロギーと実践に決定的な打撃をあたえながら、米・英の侵略者に反対し蹶起した朝鮮人民と全世界の平和愛護人民を、自らの祖国の自由と独立のための、自らの民族文化の発展のための、英雄的闘争へと鼓舞し、駆り立てた。

このように朝鮮語の歴史的発達を叙述する際には、朝鮮人民が自らの既存の言語の基本諸要素を発現、完成させ、自らの言語の民族的自主性を固守するために、どのように闘争してきたのかを必ずや探求しなければならず、これにより朝鮮語の文法構造と基本語彙の発達の特性を明らかにする朝鮮語歴史文法と歴史的語彙論研究の諸々の重要性が当然の帰結として出てくる。

言語の構造、その文法構造と基本語彙は、いかなる下部構造、上部構造にも比較し得ないほど、その生存が久しく、さまざまな時代の産物である。「現代言語の諸要素は、たいへん古い時代に、奴隷時代以前にその基礎が据えられていたと想定しなければ」ならず、「さまざまな時代を通じて作成され、言語の血肉のなかに入った文法構造は、基本語彙よりもさらにゆっくりと変化する。それはもちろん時間の流れにしたがって変化をこうむり、完成し、自らの諸規則を改善し、精密化し、新たな諸規則によって豊富になっていくが、文法構造の基礎はそれが、歴史の示すように、さまざまな時代にわたって成果的に社会に服務することができただけに、極めて長い時代に渡って保存される。」^②(イ・スターリン『マルクス主義と言語学の諸問題』21・22頁)

イ・ヴェ・スターリンのこの指示は、朝鮮語歴史文法の研究事業に対しても、行動における指針と

^① 「歴史は、言語が、きわめてねばりづよく、かつ強制的な同化にたいして大きな抵抗力をもつことをしめしている。[...] 数百年もトルコの同化主義者は、バルカン諸国民の言語をかたわ^{ママ}にし、破壊し、絶滅しようとつとめた。この期間にバルカン諸語の語彙はいちじるしい変化をうけ、トルコ語の単語や表現がすくなく採りいれられ、「集中 [収斂]」に「分散 [発散]」もあったが、バルカン諸語は堪えぬき生きのこった。なぜか。それは、これらの言語の文法構造と基本的な単語のたくわえがだいたいにおいて保持されたからである。」(全集訳 153-154 頁)。金壽卿は、オスマン帝国とバルカン諸民族の関係を、日本帝国主義と朝鮮民族との関係になぞらえている。なお、このスターリンのことは、先に引用したスターリンの「民族問題とレーニン主義」(1929年)の一節を語り直したものである。

^② 「現代語の要素は、はるかむかし、奴隷制時代以前にいしづえがすえられたものとみとめるべきである。」(全集訳 154 頁)。「幾時代もかかってつくあげられ、言語の血となり肉となった文法構造は、基本的な単語のたくわえよりもずっとゆっくり変化する。もちろん、文法構造は、時のたつにつれ、変化をこうむり、完成され、文法規則を改善し、精密にし、新しい規則をくわえてさらに豊富になるが、文法構造の基礎は非常に長いあいだ保持される。なぜなら、歴史がしめすように、この基礎はいくたの時代にわたってりっぱに社会に奉仕できるからである。」(全集訳 153 頁)

なる。例えば、朝鮮語の語音規則は朝鮮語の形態構造に利用される音韻論的手法としての朝鮮語の独特な特性の一つであり、必ず指摘されなければならないものであるが、そのなかでも例えば語末の摩擦音が破裂音として発音される規則^①は、その基礎が既に相当古い過去に築かれていたと想定する根拠を与える。まさにこの規則が朝鮮語文法構造を正しく反映するための綴字法の規定における形態主義原則の土台となっており、これがまた今後の綴字法改正、文字改革に大きな役割を果たすことを考慮するとき、この規則一つだけを中心とした朝鮮語文法構造の発達過程の探求が朝鮮語の内的発達法則の研究に寄与するところは小さくないということを感じさせる。また、朝鮮語において、母音調和の現象^②が破壊されていき、名詞の格吐で生物と無生物との区別が希薄となっていき、格の範疇と数の範疇が漸次的に精密化していく現象^③、文章において体言文と内包文[埋め込み文]が最近数十年のあいだ特に発達してきて、複合文の類型が一層豊富になっていく現象^④のなかに、われわれは「自らの諸規則を改善し精密化し新たな諸規則によって豊富に」なる文法構造変化の特性と、「人間の思惟の長久な抽象作業の結果であり、思惟の巨大な成果の指標」^⑤(イ・スターリン『マルクス主義と言語学の諸問題』21, 20 頁)としての文法の独特な特性を具体的に把握することができる。

これに関連して、朝鮮語の発達の内的法則に依拠し、また朝鮮語発達の質的变化に依拠し、朝鮮語発達の時代区分を規定する問題が重要なものとして提起される。言語発達の時期は、社会発展の基本的な時期、上部構造の交替の時期とは一致しないため、朝鮮語の語音的文法と語彙の変化の性格のあいだの質的な差異や、言語体系の全体要素のあいだの内的連携を考慮し、朝鮮語発達の独特な特性に立脚した時代区分を設定する問題は、極めて慎重に解明することが要求される。

また朝鮮語発達史の解明においては、何よりも言語の人民的性格に関するスターリン同志の命題に立脚しなければならない。言語史の研究は氏族、宗族、準民族、民族の全人民的共通語の発達と、低い形態でこれに服従している方言との相互関係の研究であり、この点において言語と方言とのあいだに鮮明な境界線をひく作業が必要となる。方言の概念のなかでも、人民大衆に服務

① たとえば、*코이*[*kos-i*]が、語末では*곧*[*kot*]と発音されるような規則のこと。

② 同一の単語内では、陽母音(ㅏ, ㅑ)のみ、あるいは陰母音(ㅓ, ㅕ, ㅗ)のみが使われる現象のこと。母音調和はアルタイ諸語の特徴と言われ、朝鮮語では時代を遡るとよりはっきりと現れる。

③ この辺りの歴史過程については詳しくないが、前者については、現代朝鮮語でも-에게(生物) / -에(無生物)の一定の区別があることから、それが歴史的に遡るとより豊富だったということだと思われる。後者は、名詞の後ろにつく格助詞(格吐)のバリエーションが次第に豊かになっていくこと、-들などが一般的に複数形として用いられるようになっていったことなどを指していると考えられる。なお、複数形の-들은本稿でも多用されているが、日本語訳では接頭辞「諸-」などによって処理している。

④ 本論文の金壽卿の文章自体が、こうしたより複雑な複合文のあり方を示している。

⑤ 前半は既に3つ前の訳注で引用した「文法規則を改善し、精密にし、新しい規則をくわえてさらに豊富になる」(全集訳 153 頁)の部分である。後半は「文法は、人間の子音の長期にわたる抽象活動の成果であり、思惟の巨大な進歩の指標である。」(全集訳 152 頁)。

する地域的方言と、所有階級の上層部に服務する階級的方言(通用語)を相互に明白に識別しなければならないが、いまだわれわれには人民的な朝鮮語方言史の研究が不足しており、階級的方言の歴史にいたっては、まったくといってよいほど研究されていない。また朝鮮の民族語の形成において主導的な役割を果たした方言の発達過程を明らかにすることが要求されるが、こうした点における文献上の方言学的な探求、現代語の言語地理学的な調査が必要となる。

朝鮮語の歴史的な発達法則の研究は、朝鮮言語学の中心的研究対象となる現代朝鮮語の研究と必ずや結び付かなければならない。ただ現代朝鮮語の研究のみが言語体系の完全な状況を示すのであり、したがってこの研究が有する理論的、方法論的、および実践的意義は巨大である。

現代朝鮮語の研究は当然ながら語彙論と文法の2つの部門に分かれることになる。言語の語彙的部分の研究においては、「言語の語彙構成における主要なもの」(イ・スターリン『マルクス主義と言語学の諸問題』19頁)であるとともに、言語の一般的な語彙構成の核心となる基本語彙の規定と研究が第一次的な意義を有している。当然のことながら、きわめて古い時代にその基礎が据えられた基本語彙は、それぞれの具体的な言語の発達の全期間を通じて、その限界と質的状态という点において変わらぬ状態では存続できない。基本語彙は、あらゆる根幹的な単語をそのなかに含みながら、不断に新しい諸単語によってその構成を補充し、語辞派生的な能動性を喪失した一部の諸単語を脱落させた。このような古い要素の死滅と新しい要素の蓄積のなかで(後者が前者よりもその数が多いことは当然である。そうでなければ、語彙論の分野において言語の発達とはあり得ない)、基本語彙のかかる漸次的で不断の変化のなかで、またその個別的要素の機能分野の質的な改編と拡張のなかで、語彙の部門における言語の完成化が表現される。

基本語彙は、言語体系から遊離しているのではなく、言語の全体的な語彙構成と最も緊密に連結されている。言語の語彙構成とその基本語彙は、不断に相互交流するため、そのあいだに固定不変の分界線を引くことはできない。基本語彙は、最も重要な語辞派生的な同族語の基礎となり得る諸単語を、それ自体の内部に集中させる。この諸単語を、基本語彙は言語の語彙構成の極めて多様な蓄積のなかから選択してきて、ときには他の言語から借用してくることもある。このとき、外国語の単語は借用した言語が作用する法則に順応して改造され、全人民的な所有物として転化するものであり、もともと外国語の単語であることが分からなくなることが多い。

一方、基本語彙は「言語に対し、新たな単語を造成するための土台を提供する」(イ・スターリン『マルクス主義と言語学の諸問題』19頁)。言語の語彙構成は社会の文化の発達とともに発展し豊富化するが、このとき言語は何よりもその基本語彙に依拠してこれを利用することによって数多くの新しい諸単語を造成する。

このとき、言語体系の内部に存在し、それぞれの言語の内的な発達法則のなかで表現される構

造上の関係が、言語の語彙構成とその基本語彙との相互関係のなかに明白に現れるという事実を指摘しないわけにはいかない。言語の語彙構成の発達形態を規定する際に、このような構造上の関係は、一方において基本語彙の土台のうえに実現される新たな単語の造成が全人民的言語の文法の法則によって進められるという事実と、他方では、言語の語彙構成の各種の諸要素が相互に異なる変化の速度をもっているという事実によって規定される。

もちろん、基本語彙の土台のうえに新たな単語が造成されるときに利用されるもろもろの手法は、言語史の全ての期間を通じて不変のものとして存続することはできない。したがって言語の基本語彙と語彙構成の発達の形式と法則およびそれらの相互関係の流行を研究する際には、新たな単語造成の生産的な手法と非生産的な手法の歴史的な可変性も、あわせて設定することが必要となる。

特に朝鮮語の場合、解放後の共和国北半部における政治、経済、文化の飛躍的な発展による新語造成に対する急激な要求の成長は、朝鮮語の語辞造成の法則性を探究する課業を、言語学徒らの前に急を要する任務として提起している。朝鮮語の語彙構成の内的発達法則に合致する語辞造成の手法の研究は、固有朝鮮語と漢字語の2つの部門において進行しなければならないのであり、この問題の実りある解決は大きな現実的意義を有する。ここでは言語の本質的機能である通信的機能とその全人民的性格が特に考慮されなければならない、主として漢字語の場合、意味上の衝突を回避するための同音異義語の処理問題が特に提起される。

語彙の部門における言語の発達は、量的指標だけにとどまるものではない。「語彙構成が豊富で多面的であるほど、言語は一層豊富で発達したものとなる。」(イ・スターリン『マルクス主義と言語学の諸問題』19頁)というスターリン同志の指示は、それ自体、語彙の質的な豊富化をも意味している。この点において、共和国の科学技術の飛躍的成長に照らした科学的述語の問題を全人民的言語との関連のなかで研究し、その制定に有益な規範および統一の原則を制定する事業は、大きな実践的意義をもつ。ここで、ソ連科学アカデミア総長アー・エン・ネスメヤーノフ(A. H. Несмеянов)が、スターリン同志の著書刊行1周年に際し、ソ連科学アカデミア社会科学文化合同会議の開会辞で陳述した次のことばは、示唆するところが極めて大きい。「ときにわれわれが忘れていたが、いかなる科学に対しても言語のもっている巨大な意義に関する結論が明白に出てくる。科学の要求に対応して言語が発達し、適応性を有しているという事実は、思想の水準、したがって科学の質に肯定的な影響を及ぼさざるを得ない。こうして科学における言語に対する、科学の言語に対する配慮は、それがときに考えられるような、そうした副次的な事業ではなく、ただほっておけばよいような事業でもない。それは綿密な科学的研究の対象とならなければならない。」(『ソ連科学アカデミア通報』、1951年第7号、6頁)

また、語彙構成を量的、質的に豊富化するという面において、文芸作品の言語と作家の文体の

研究の問題は、とりわけ朝鮮においてはそれが未開拓であるだけに、今後の言語学者および文芸学もの大きな努力を要求する。作家の言語における全人民的のものと個人的なものとの、言語の通信的機能と表現的機能との、相互関係の問題および文体と世界観の問題などは、理論的、実践的に興味ある研究対象であり、現代文学発展にける朝鮮民族語の豊富化と発達のための先進的作家たちの闘争の研究は、朝鮮語発達史上の重要なテーマの一つである。

語彙構成の問題とともに、辞典編纂の問題が大きな位置を占めることになる。現代語の注釈辞典においてであれ、外国語との対照辞典においてであれ、あるいは語源辞典、歴史辞典においても、その編纂の基本法則はスターリン同志の語彙論に関する諸命題によって再編されなければならないのであり、辞典編纂事業は今日になってようやくその意味と目的を有することになったと誇張無く言うことができる。たとえば、簡易辞典の場合、そこでは何よりも基本語彙が収録されなければならない、歴史辞典の場合、古語の墓からの無原則的で非体系的な発掘のかわりに、ある単語がどのような期間、どのような地域、どのような社会層で使用されたのかを明確に究明する課業が提起される。朝鮮語の場合、直接的な各種辞典の編纂事業とともに、辞典編纂の理論研究の問題が提起され、同義語・反対語辞典などもその必要が感じられている。

スターリン同志は、文法をマル派の「新言語理論」による弾圧から解放させ、文法がもつ巨大な認識的、教養的な意義を明らかにした。スターリン同志によれば、言語の文法構造は「言語に対して整然とした理性的」な性格を付与したのであり、「まさに文法の力によって、言語は人の思想を物質的な言語の外被を着せる可能性を得る。」^①(イ・スターリン『マルクス主義と言語学の諸問題』19,20頁)

言語の各側面——語彙的側面と文法的側面——は、それに内属した独特の特性を有している。文法の特性は、それが「言語の建設資料たる語彙構成を文章のなかに組織」する点、それが「単語の変化の規則、文章における単語の結合の規則を規定する」点、それが特殊なもの具体的なものを抽象し、「単語の変化と文章における単語の結合の基礎となっている一般的なものをとりだす」点^②(イ・スターリン『マルクス主義と言語学の諸問題』19,20頁)、そしてそれ自体が言語の組織的な中心でありながら数世紀間にわたって文法の法則をつくり、長いあいだ自らの構造の基礎を保存する言語の最も堅忍性のある部分となる点にある。だが、言語の語彙構成とその文法構造の特性を考慮するならば、またそうであるからこそ、エン・ヤ・マルの後継者たちに特徴的な語彙論と文法との無秩序な混乱を不可能なものとしているが、だからといって、文法的現象と語彙的現象を相互に孤

^① 「文法は、単語の変化の規則や、単語をくみあわせて文を構成する規則を規定し、このようにして、調和のある、意味をになった性格を言語にあたえる。文法（形態論、文章論）は単語の変化と文中の単語の組合せの規則の集成である。したがって、言語は、ほかならぬ文法のおかげで、人間の思想に言語という物質的な外被をきせる可能性を得るのである。」（全集訳 151 頁）

^② 一つ手前の訳注にある箇所のほか、次の部分を引用している。「文法は、単語においても、文においても、特殊なもの、具体的なものを捨象しながら、単語の変化と、文中の単語の組合せの起訴にある一般的なものをとりだし、これをもとにして文法の規定や法則をつくりあげる。」（全集訳 152 頁）

立したものの、さらに甚だしくは相互に対立しているものとも見てはならない。文法と語彙論は相互に深く浸透しており、相互に多様な連携を結んでいる。文法と語彙論のかかる相互連携と相互浸透は、それぞれの個別的な言語に特徴的であり、言語発達の内的法則形成に直接影響を与える構造上の関係の体系を成している。

スターリン同志は、文法的規則のなかに、「人間の思惟の長久な抽象作業の結果」(イ・スターリン『マルクス主義と言語学の諸問題』20頁)が結晶化されていると教えている。文法的規則のなかに「人間の思惟の長久な抽象作業」を固着させる過程は、空虚な空間のなかに、純粋な思惟の範疇のなかに実現するものではない。文法は、言語の語彙的単位に表れる特殊なものから自らの規則を抽象化しては、文法的範疇の独特な特性を有した一般的な範疇のもとにこれを帰納し、またこれを具体的な言語資料のうえに発現させるのである。

言語の歴史的研究は、文法的な諸指標、例えば接辞がかつては独立的だった語彙的単位から発達して出てきうること^①を示している。スターリン同志が教示しているように、言語における発達は爆発の方法ではなく、「新たな質の要素を漸次的にまた長久に蓄積する方法によって」(イ・スターリン『マルクス主義と言語学の諸問題』23頁)実現されるだけに、言語の体系のなかには語彙的な要素から文法的な要素に転換される途上にある過渡期的な諸要素が存在すると結論づけることができる。それらが使用される場合によって、あるいは文法的形象として、あるいは語彙的形象として固着され得る。この過渡期的な諸要素は、自らの語彙的な意味をより一層捨象し、抽象的で範疇的な内容をより一層蓄積しながら、文法的形象へと転換される。こうして、最初は自らの規則と法則によって、比較的狭い範囲の語彙的事実を包括する文法的な範疇や諸過程が創造される。その後、こうした種類の新生の文法的形象は非生産的なものとなって、若干の残存形のなかにその痕跡を残しながら、能動的な力量としては言語から消え去ってしまうか、あるいは逆に自らの行動範囲をさらに広げながら、より大きな抽象性を得たりする。こうして、言語の体系から取り出し得る文法的範疇の総体のなかで、特殊で具体的なものから抽象性の程度によってその等分を設定することができる。その結果、文法的過程において最も抽象的な範疇は最も大きな安定性を有し、抽象性が少ない範疇はずっと変動性が多いという一般的な法則を設定することもできる。ここに言語要素の発達の不均衡性の法則が文法分野において現れていると見ることができる。この法則の作用は、言語の文法構造のあらゆる堅忍性にもかかわらず、言語の発達と完成化の過程における文法的規則の相互間の関係と一定の語彙的形象との連携において、若干の変動をもたらす得る。

こうして、記述文法である現代語の文法は歴史の背景のうえに、歴史の助けを得てはじめて実りあるかたちで解明することができ、また記述文法は言語体系の一定の状態を静態的に分析するこ

^① 現代であれば文法化 (grammaticalization) と呼ばれる現象のこと。たとえば、助詞-부터 (~から、~より) は動詞붙다 (つく、くっつく) から歴史的に変化し、文法的な要素となっていくものである。

とで歴史的研究の出発点となるため、現代語の文法と歴史文法とを対立させることはできなくなる。

また、文法を構成する形態論と文章論との相互関係の問題は、言語の文法構造に関するスターリン同志の理論の観点から特別に考察されることを要求する。エン・ヤ・マルとその弟子たちは、この問題に大きな混乱をもたらし、文法の分野における文章論の優位性に関する定式を提出した。「文章論は音声言語の最も本質的な部分である。語音論が形態論に対する技術にすぎないのと同様に、形態論は文章論に対する技術にすぎない。」(エン・ヤ・マル選集、第2巻、401頁)こうして文章論と形態論との原則的不平等が主張されており、形態論は文法の基本分科としての文章論に対して補助的な部分として従属されていた。

しかし、人間の思想を物質的、言語的外被によって包み込むためには、第一に、単語が自らの機能にしたがって変化することが、換言すれば、それが形態論的に機能することが必要となり、第二に、単語が文章の単位のなかで結合することが、換言すれば、それが文章の成分として機能しながら文章における単語の組織された結合を構成することが必要となる。こうして、単語の変化の規則を設定し、該当する一連の文法的範疇を解明する形態論は、文章における単語の結合の規則を研究する文章論と相互に補充しながらも、互いにまったく同等の権利をもっているのが明白である。形態論と文章論が具備されてはじめて言語の文法構造に関する理論が成立する。形態論の重要性とその独自の意義、そして文章論との同等の権利を認めるということは、形態論と文章論との相互作用を否認したり、さらには品詞の研究と結びつく文法的諸範疇を深く解明するのに文章論的観点を広範に適用するのを排除したりすることではない。

今日、現代朝鮮語の文法体系の樹立においては、意見の差異や対立が他の何よりも甚だしく、研究の手法が学者ごとに異なって進行している。その原因を調べてみれば、まず実践的な原因を挙げることができる。文法上の数多くの問題の解明が偶然の資料に、貧弱で同質的な資料に、根拠づけられている。したがって現代朝鮮語の文法構造上重要な諸側面——品詞分類の問題、そのなかでもいわゆる冠形詞、指定詞の問題、文法的範疇の設定の問題、特に述語として用いられる名詞、形容詞、動詞の時称、法、階層等の問題、吐と助詞との関係、助詞と副詞と不完全名詞との関係、後置詞、接続詞の問題、文章成分と品詞との関係、様態語の問題、複合文の問題など——多数の諸問題がまだまだ十分に研究されていない。現代朝鮮語の生気溘刺な文法上の現象が、人民大衆の言語、文学作品、新聞雑誌の言語などのなかから広範に採取されるのではなく、文法的記述の依拠する具体的な資料が一つの文法書から他の文法書へと転々と利用されたり、あるいはあらかじめ設定された自分の文法的規則に合った事実だけを各種文献から探索してもってきたりするような現象が、いまだに存在している。また、一般言語学と他の言語の研究から帰結される清新な理論と思想が、しっかりと広範に文法理論へと導入されえずにいる。したがって、現代朝鮮語の文法構造研究において、言語学理論の一層深奥な利用と、生きた言語、新鮮な資料の一層広

範な収集が要求される。第二の原因は、確固たる理論的基礎の欠如、基本的な文法的書概念の厳密な規定の欠如にある。単語、文章、吐あるいはその他の数多くの文法的諸概念を使用しながらも、その確然とした理論的な定義がない。このように中心的な諸概念に動揺がみられる場合、文法は言語の外的な形態の単純な目録に、あるいは言語のうえに発現される論理的な諸範疇の抽象的な記述に転換しがちである。したがって現代朝鮮語の文法研究者たちは、自らの体系の基礎に置かれている文法的諸概念の内容を厳密に解明する必要がある(現代文法の分野における意見の不一致に関しては、ヴェ・ヴェ・ヴィノグラードフ『ロシア語』1947年、3頁参照)。

朝鮮語の文法構造の研究に関連して大きな実践的異義をもっているのは、綴字法の問題である。わが共和国の飛躍的な経済的、文化的発展は文字と印刷物の役割と意義を非常に高めており、これにともなって数百万大衆に服務する綴字法の意義が一層重大になった。綴字法は、極めて重要な社会的規範のうちの一つであり、その規則は強固で安定していて、あらゆる人々に義務づけられることが求められる。

朝鮮語の綴字法は独特の体系を成しており、それ自体が朝鮮語の語音組織に対応しているのがあるが、またその形態論的構造と結びついている。その特質は、形態部〔=形態素〕の記写の唯一性にあり、これにもとづいて意味と結びつかない発音上の動揺は文字のうえでは表現されない。形態主義的原則により、発音のうえでは区別されない単語や形態が文字のうえでは分化し、この点が書写語の理解を極めて容易にさせる。また形態主義的な記写は単語の構成を明白に見せることによって、外国人の朝鮮語研究を容易にするという事実も注意を引く。

しかし、現行の朝鮮語綴字法にはまだ形態論と語音論との相互関係の設定、語音の面に対して意味の面が有する優越性の認定、形態主義の原則の一貫した実施において、少なからず欠点を有している。朝鮮文字体系発達の基本路線を正しく継承し、今後あるべき漢字撤廃とばらし横書きを見すえながら、朝鮮語文の統一と発展のために綴字法を慎重に研究、制定する事業は極めて重要な意義を有しており、この点において朝鮮語文研究会が制定した「朝鮮語新綴字法」は、こうした要求に基本的に合致するものであり^①、今後この綴字法のさらに深い研究と広範な不朽が切実に要求される。

これに関連して、^{キム ドッボン}金料奉先生が1949年1月15日の訓民正音創制505周年記念報告会^②の席上で「今日を記念するわれわれは、この訓民正音をしてわれわれの意思と事物の動きを表示する

^① これについては拙著のⅡ・Ⅲに詳しく記しているのので、参照されたい。朝鮮語新綴字法は、将来的にハングルをばらし書き(풀어쓰기)へと発展させるという見通しのもとで、朝鮮語文研究会(法令にもとづいて設置された公的な組織)が1948年に提案した新たな正書法である。

^② 朝鮮語文研究会は1947年に10月9日を「ハングルの日」として記念するのをやめ、1948年より1月15日を訓民正音創制記念日とすることにした。この点については、拙稿「訓民正音創制記念日の南北間の違いをめぐって」『社協京都会報』21, 2019年を参照。

のに一層正確で便利なものへと発展させることに、それを記念する意義があるのだ。それゆえ、今後朝鮮の語文学研究者は、根本において立派であるわれわれの文字を、理論に合わせて、使用に便利なように一層発展させることによって、民族文化の発展に貢献しなければならないのだ(『労働新聞』1949年1月18日付)とおっしゃったのは、朝鮮言語学徒の実践的事業において貴重な指針となる。



以上、朝鮮言語学の建設途上において提起される数多くの問題のうち、まずはいくつかの問題だけを極めて簡略に提示した。

今から2年前、国際情勢の緊張した環境のもと、米帝侵略者らが朝鮮に対する武力侵攻を開始するわずか何日か前に、帝国主義の国々で新たな戦争準備が一層激化している時期に、言語学の基本的諸問題に関する科学的な著述を掲げて、全世界の勤労人民の師匠が出現したという事実は、強力なソビエト連盟の人民たちが共産主義社会の雄大な建設のための平和的事業に従事しており、科学に対する大きな尊敬の心と極めて平穏な態勢をもって米・英帝国主義者らの狂乱的な新たな戦争準備に対処していることを重視するものであった。この事実は、平和と民主主義陣営の不敗性とマルクス-レーニン主義の力量の偉大さを証明するものであり、スターリン的言語理論に鼓舞された朝鮮の言語学徒を、かれらの前に提起された諸般の課業の完遂のための、緊張をもちながらも頑強な事業へと呼び覚ました。

われらの英明な首領^{キム イルソン}金日成將軍は、「われわれは世界の先進文化、特に偉大なソ連をはじめとする人民民主主義各国の文化を大量に摂取しなければならず、われわれはソ連の先進文化と芸術を学ぶことによるのみ、燦爛たる民族文化を建設することができる」とおっしゃった^①(作家・芸術家に下された激励のことばより)。

スターリン的段階に入ったソビエト言語学について、われわれは最も慎重で実直に学ぶ人の態度を持たなければならず、先進的ソビエト言語理論の土台のうえに大胆で革新的に自らの事業を推進させることによって、朝鮮の言語研究事業は今後の無限な発展が保障されるだろう。

^① この金日成教示の出典が表記されていないので、この時点では活字化されていなかったものと思われる。